

入学式告辞

今日、晴れて入学の日を迎えられた皆さんに、名古屋外国語大学を代表して心からお祝いを申し上げます。また、会場にお越しくださいました保護者の皆さまには、心より御礼を申し上げます。

さて、今日から皆さんの新しい学び舎となる名古屋外国語大学は、創立から二十八年というまだ歴史の浅い大学です。人生に喩えるならば、青春の真つ盛りといったところでしょうか。しかし、私たちの大学は、すでに、国際系の大学として、中部地区をリードし、代表する大学へと成長し、今は、さらなる飛躍に向けて、新たな助走を開始したところです。今後、この勢いを継続させ、本学の存在を日本全国に向かって広く周知させ、持てる力をフルに発揮すべく努力を重ねたいと願っています。

今日は、この晴れやかな門出の日にならぬ、本学での学びの意味、そしてその指針となる「建学の精神」について、私が考えるところをお伝えしたいと思います。皆さんは、まだ、ご存じないかもしれませんが、本学の建学の精神は、「人間教育と実学」であります。

「人間教育と実学」――まず、何にもまして、一人ひとりの「個性を生かした」人材の養成に重点が置かれています。そしてそれを土台としながら、地域社会の発展と、広くは人類の福祉の向上に役立てる人材を育てることが、使命とされています。最初の「人間教育」は、少し平たく言い直してみると、人間社会に生きる上で求められる一市民としてのモラル、教養の教育を意味しています。少し古風な言い回しを用いると、学生の皆さんには、「徳」とされるものを身につけることが要求されているのです。徳、これを英語で表現すれば、virtue でしょうか。

私は最近、中国の故事成語に次のような素晴らしい一句があることを知りました。

「桃李成蹊(とつりせいけい)」という言葉で、中国前漢時代の歴史家、司馬遷の書いた『史記』に出てくる言葉です。正確には、「桃李不言下自成蹊」と言い、中国語の読みでは、「タオリーブーイエン、シャーツーチエンシー」となるようです。

「桃李の言わざれど、下、自ら蹊を成す」――桃李の桃とは、もも、peaches の意味、李は、すもも、plums の意味です。これを平たく解説すると次のようになります。

「桃(もも)や李(すもも)の木は、みずから言葉を発することはないものの、そのかぐわしい香りを求めて、自然と人が集まってくる。そして結果として木の下には、道ができる。徳のある人は、自分から声に出して言わなくても、自然と人が集まってくる。そして道ができ、ついでに「道があるから」ということを教えています。古代中国に生きた李広將軍という実在の優れた軍人を称える目的からこのような表現が生まれたことですが、悲運の將として知られたこの李広將軍は、泉を発見すれば部下に先に飲ませ、食事にも下士官と共にし、全員が食事を始めるまで自分の分には手をつけなかつたと言われるほどの清廉高潔の士でした。ちなみに「桃李成蹊」は、お酒の銘柄にもなるほど、よく知られた言葉であり、この言葉を建学の精神としている大学もあります。

では、「徳のある人」とはどういう人と言うのでしょうか？ 先ほど、英語では、virtue という言葉が当てはまると言いました。徳の考へ方は、おそらく欧米とアジアの人々の間で少なからず違いがあると思います。しかし今は、そうした差異にあえて目をつぶり、「徳」ないし「美德」という概念から連想される人や資質を、いくつか列挙してみましよう。たとえば、気品溢れる人、意志の強い人、人間的に温かみのある人、理性、忠誠心に優れた人、さらには勇気、名誉を重んじる心、誠実さ、自信、謙虚さ、人への信頼、そして最後に健康。ここにさらに付け加えると、世界に対してポジティブな明るさを見方ができることも大切です。むしろ、これらすべての資質を身につけることは困難なことで、一朝一夕、いや、大学四年間の学びでそれが身につくというものではありません。しかし、本学が掲げる「建学の精神」のもつとも大切な柱がここにあることを忘れないでほしいと思います。桃の香りのように、自ずと人を引き寄せることのできる魅力的な人になるべく、私たちの大学でその大切な一歩を踏み始めてください。

さて、本学の建学の精神のうちの後半、「実学」についてはどう考えるべきでしょうか。英語ですと、practical science がそれに相当します。実学の実は、もちろん実りであり、成果です。ここでは、何よりも社会での実践に役立つ知識を学ぶということが意味されています。先ほどの「桃」や「李」の香りの意味するものが、人間の心や精神のありよう、端的に気品を意味しているのに対し、実学がまさに目標とするのは、むしろ実り、ないし成果そのものです。現実社会は、どこまでもシビアで冷徹なロジックが支配し、そこで生きるために求められるものは、まさに批判的思考です。自分と世界の距離のみならず、世界の仕組みそのものを正確に把握する力。

ここで一つ明治期の日本が使われた「去華就実(きよかしゅうじつ)」という少し古い言葉を紹介します。去華の「去」は、「去る」ことを、「華」は、華麗な華、華やぎ、華やかさの意味です。そして就実の「就」は、就職の就。就実とは、実をとる、実に就く、を意味するわけですね。これを平たく言い換えると、「外見の華やかさから離れて、実際に役に立つ人間になる」こと、端的に、「花を捨て、実を取る」ことを意味します。

「桃李成蹊」と「去華就実」、同じ四字熟語でも、謳われている精神は、著しく異なります。しかし、これら二つは、じつは一枚のコインの表裏の関係、切っても切れない関係にあります。李広將軍は、言うまでもなく、たんにその清廉高潔な人間性のみならず、軍人としても卓越した実力の持ち主でした。

今日、めでたく本学への入学を許可された皆さん。桃の花の香りを愛でる気持ちをお忘れず、桃の花の香るような気品に溢れる人間に育ってほしい、と同時に、外見の美しさにとられず、時には、孤独を、そして孤立することを恐れず、現実の社会で役に立つ人間になるという、毅然たる心構えを培ってほしい。

さて、私たちのキャンパスは、日進の小高い丘の上に立っています。お隣では、私たちの姉妹校である名古屋学芸大学(NUAS)の学生たちが学んでいます。今日から四年間、名古屋外国語大学(NUFS)のみならず、お隣の名古屋学芸大学の学生たちとも切磋琢磨し合いながら、充実した学生生活を送ってください。

そして最後に、記憶にとどめてほしいことが一つ。今日この日から、名古屋外国語大学は、皆さんにとって人生の長い道連れとなるということ。皆さんのこのからの努力と将来における活躍によつて、私たちの大学それ自体の輝きと未来もまた、日々、更新されるということ、私たち教職員一同も、そのことを胸に刻み、皆さんのよりよき学生生活のために全力を尽くす所存です。

以上をもつて、学長の告辞といたします。

二〇一六年四月一日

名古屋外国語大学長

亀山 郁夫